

「中国残留邦人」という言葉

まごい存じですか

昭和20年当時、中国の東北地方（旧満州地区）には、開拓団など多くの日本人が居住していました

日本と中国の間に国交がなく、人の交流や文通もままならない状態が長く続きました。

だが、同年8月9日のソ連軍の対日参戦により、戦闘に巻き込まれたり、避難中の飢餓疾病等により多くの方が犠牲となりました。このような中、肉親と離別して孤児となり、中国の養父母に育てられたり、やむなく中国に残ることとなった方々のことを「中国残留邦人」と言います。「中国残留邦人・中国残留日本人孤児」の引揚げは、昭和21年5月から開始され、民間団体を中心に昭和33年まで集団引揚げが行われてきました。その後も個別引揚げが行われていたものの、昭和47年まで

昭和47年の日中国交正常化を契機として、多くの残留邦人が帰国するようになり、中国残留孤児問題がクローズアップされるようになりました。厚生省（当時）は、種々の支援策を実施してきました。

現在、築上町上別府にお住まいの高橋マス子さんも終戦を中国で迎え、帰国することができず、昭和54年の一時帰国が可能となるまでの間、身寄りもない中国で生活してこられました。今回、当時の体験の一部をご紹介します。



高橋マス子さんの手記①（抜粋）

十五歳、戦乱の中国に

一人残されてく

昭和十七年築城小学校を卒業すると同時に私は女子挺身隊として満州（今の中国東北地方）にゆきました。

（中略）

八月十五日に敗戦になりました。日本兵は次々にソ連に連れて行かれ、私もソ連兵によって新京に連れていかれました。食べられないものもお金もなく、中国人の畑に入って、腐れかかった野菜を拾って食べました。しかも同じところに長くいると日本人とわかって、大勢の中国人から石や棒で襲われます。命からがら逃げ回っていました。（中略）何もかも配給でした。大人に粃が月三十斤、子どもに十八斤、それ

を背中に担って大隊の売店に摺りにゆき、おつりで塩を買いました。その塩を包んであった新聞を読んでびっくり、一九七四年に日中国交が回復したと書いてあったのです。それだけ読むとあとは涙で読めなくなりました。思わず手を合わせ神に感謝しました。もう何も手につかず人民公社に行き手続きをもらい、日本の兄弟に手紙を書きました。日本語も日本の文字も忘れていました。それでも兄弟には通じたよう、間もなく返事と写真まで届きました。夢ではないかと自分の顔をつねって見たほです。思い出しても涙が出ます。

一九七九年、親捜しで、三十七年振りに祖国の土を踏みました。小倉の駅で姉との再会はただ抱き合って泣くだけでした。（中略）子供たちは母一人日本に帰すわけにいかぬ自分たちもついていて母の面倒を見たいといい、日本語の解らない家族五人を引き連れて一九八一年に帰国しました。中国での苦労を思うとどんな苦労も我慢できると明るく笑う私ですが、どの国も侵略してはならないし、どこの国の国民も戦争に巻き込まれるようなことがあってはならないとしみじみと考えております。